

説教余滴 2019年12月1日『モンテ・クリスト伯とデュマ』

1844年から46年、フランスはパリで新聞小説として連載された「モンテ・クリスト伯」は空前の人気を博します。単行本としても出版され、推定部数は当時としては驚異的な4万、人々の心をとらえました。人気の最大の秘密はその構成力。読者に新聞を購読させるために、毎回小さな山場を持ってきて、さらに次回に続く謎を残し各回が終わるという手法です。日本語版は文庫本で7巻からなる長編です。

「モンテ・クリスト伯」の作者アレクサンドル・デュマは、自身も革命の申し子でした。父はフランス貴族と黒人女性との間に生まれたいわゆる「私生児」で、元奴隷。大出世して将軍になるが、ナポレオンと仲違いし不遇の内に死にます。デュマの多くの作品は憧れの父の姿を主人公に投影したものともいわれます。またデュマ自身の生涯も波瀾万丈で自らの生活が多くの作品で引用されています。「モンテ・クリスト伯」でダンテスがカスピ海から生きてきたままチョウザメを運びふるまう豪華な宴会シーンは、モンテ・クリスト城と名付けた自宅での暮らしそのもの。古い因習にとらわれることなく革命後のフランスを自由に生きた近代人デュマの生き方でした。

最後に「モンテ・クリスト伯」の著者デュマについてももう少し深く知りたい方に、佐藤賢一氏の『褐色の文豪』をおすすめします。フランス革命後の混乱の時代の波をうまくつかまえ、自由奔放に生きたデュマの生涯が余すところなく描かれています。この本は三部作になっており、デュマの父、トマ將軍の伝記『黒い悪魔』、デュマの息子、デュマ・フィス（「椿姫」の著者）の伝記『象牙色の賢人』と続けてお読みになれば『モンテ・クリスト伯』が書かれた時代背景がより深くお分かりいただけると思います。あわせてお楽しみ下さい。